

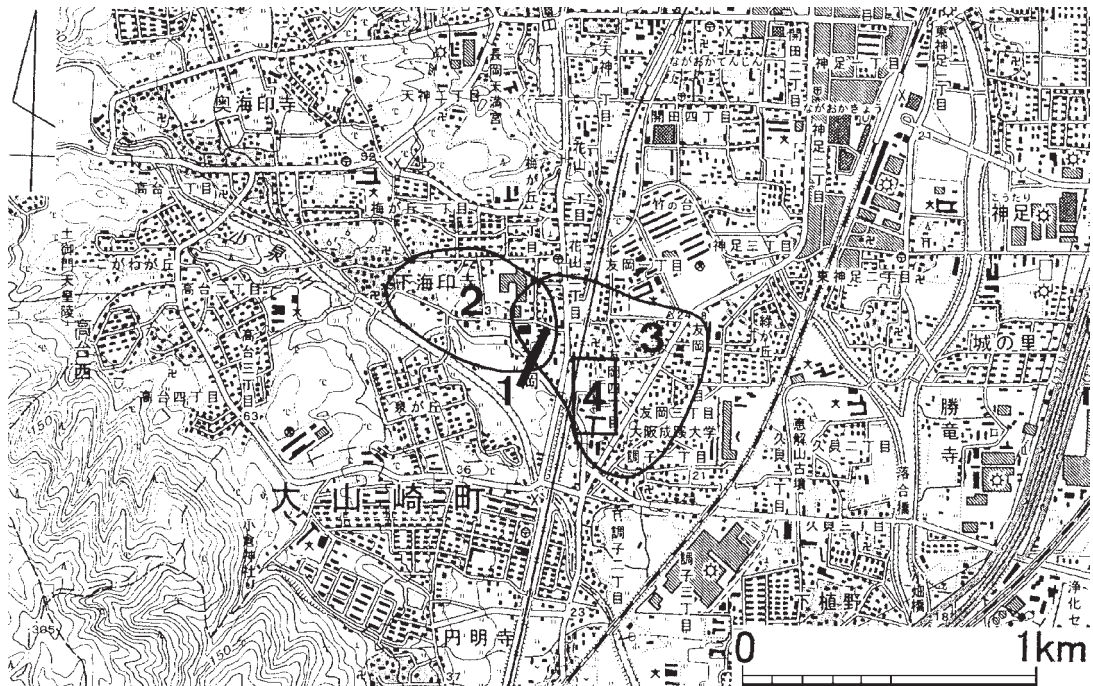
# 4. 長岡京跡右京第910次(7ANOIR-5・NNT-3地区)・ 941次(7ANOOD-5・OIR-7・NNT-4地区)・友岡遺跡・ 伊賀寺遺跡発掘調査報告

## 1. はじめに

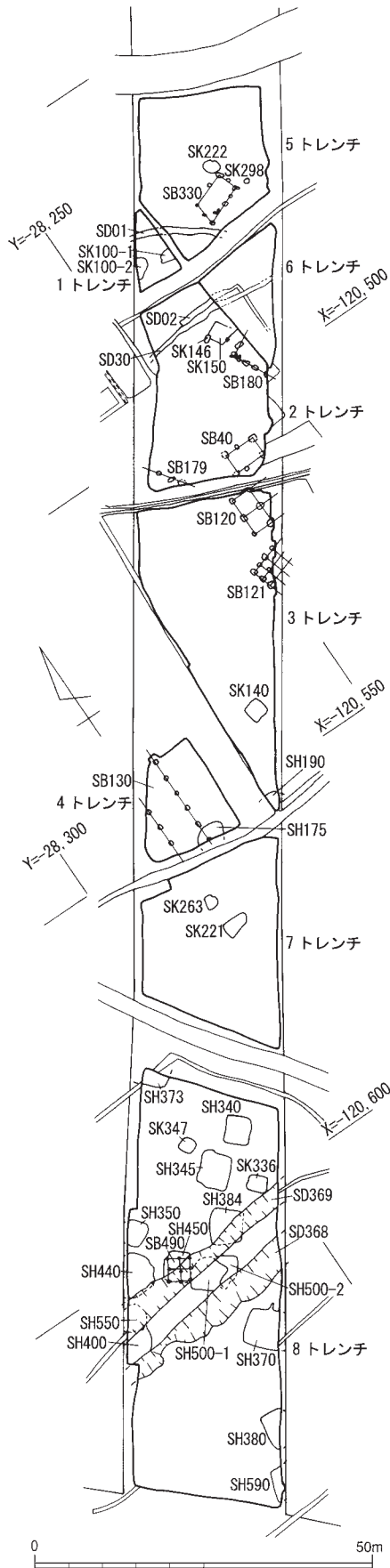
この調査は、石見下海印寺線地方道路交付金(街路)事業に伴う事前調査であり、京都府乙訓土木事務所の依頼を受け実施した。

調査地は、長岡京市友岡西畑、下海印寺伊賀寺・下内田に所在する。小泉川左岸の河岸段丘とその北側に広がる低位段丘上に立地する。付近の標高は、27.1～30.1mである。長岡京の条坊復元によると、七条三坊十一・十三・十四町(新条坊では八条三坊九・十五・十六町)にあたり、新条坊の七条大路・八条条間北小路・西三坊坊間西小路が想定される位置にあたる。また、旧石器時代から中世にかけての集落遺跡である友岡遺跡、伊賀寺遺跡の範囲にも含まれる。

周辺での調査状況は、調査地西側40mで、現NTT建物建設に伴い昭和56年度に実施された右京第70次調査<sup>(注1)</sup>では、旧石器時代から近世に至る遺物が出土した。6世紀末～7世紀前半の竪穴式住居跡7基、土坑1基、西三坊坊間西小路、七条大路北側溝の可能性が指摘されている溝、鎌倉時代の掘立柱建物跡6棟・土坑3基・柵列が検出されている。古墳時代後期の竪穴式住居跡は右京第324次調査<sup>(注2)</sup>でも検出されている。北側の右京第118次調査<sup>(注3)</sup>では、緑釉火舎などの出土から寺院



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部・淀)  
1.調査地 2.伊賀寺遺跡 3.友岡遺跡 4.靱岡廃寺



第2図 トレンチ配置図

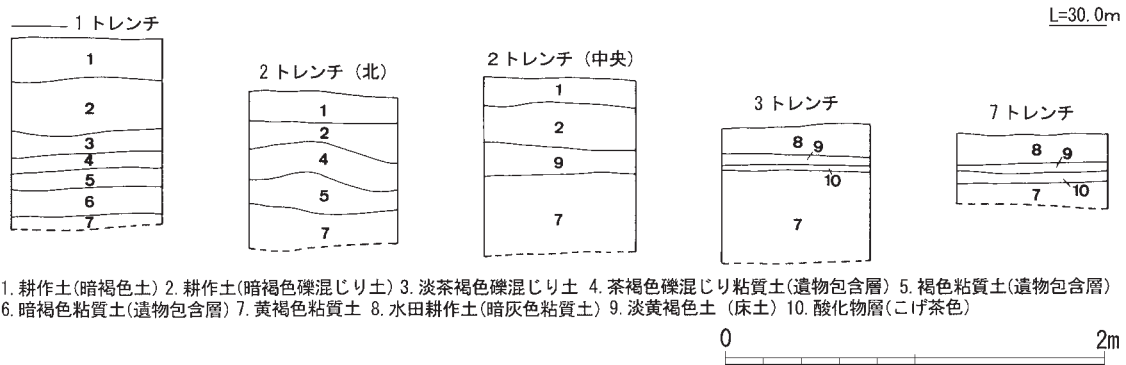
関連の施設が推定されている。また、右京第661次調査<sup>(注4)</sup>では鎌倉時代の掘立柱建物跡、長岡京期の東西溝等が検出されている。右京第423・434次調査<sup>(注5)</sup>・<sup>(注6)</sup>では、古墳時代～中世の遺物が出土している。

本道路事業に伴う友岡遺跡内の調査では、右京第787次調査<sup>(注7)</sup>・<sup>(注8)</sup>・<sup>(注9)</sup>829・856次調査が北側で行われている。右京第787次調査では、平安時代前期・鎌倉時代の掘立柱建物跡の一部が検出された。調査地のすぐ北側となる右京第829次調査では、飛鳥時代の溝2条、長岡京期の条坊内の宅地を細分する区画溝と想定されている溝が検出されている。それらとともに、平安時代前期～中期の掘立柱建物跡2棟、柵、鎌倉時代には井戸や溝とともに多数の柱穴が検出された。右京第856次調査では、12世紀後半～14世紀前半にかけての遺物とともに、多数の柱穴が検出された。

南側の河岸段丘上では、道路予定地内や第二外環状道路建設に伴う右京第907・943・947次調査<sup>(注10)</sup>・<sup>(注11)</sup>で、縄文時代中期末～後期後葉の遺物とともに竪穴式住居跡・土坑・火葬人骨を埋納した墓壙や、古墳時代前期・後期の竪穴式住居跡、長岡京期の区画溝など多くの遺構が検出されている。このように、周辺では多くの調査が行われ多大な成果が上がっている。加えて、低位段丘上では、古墳時代後期～鎌倉時代の遺構が確認されている。

調査は、平成19・20年度の2年度にわたって実施した。現地調査は、平成19年度(右京第910次調査)は当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、同主任調査員増田孝彦、同専門調査員竹井治雄が担当した。調査期間は、平成19年7月26日～平成20年1月30日、調査面積は、1,200㎡である。平成20年度(右京第941次調査)は、調査第2課調査第1係長小池寛、同主任調査員松井忠春・増田孝彦、同調査員石崎善久・高野陽子が担当した。調査期間は、平成20年4月24日～10月31日、調査面積は2,200㎡である。本調査報告は、増田が執筆した。

調査にあたっては、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・京都府教育委員会・京都府乙訓土木事務所・地元自治会・近隣住民の方々をはじめとす



第3図 トレンチ土層柱状図

る関係諸機関からご指導・ご協力をいただいた。現地作業・整理作業については、<sup>(注12)</sup>補助員・整理員の協力を得た。記して感謝したい。

なお、調査に係る経費は、全額、京都府乙訓土木事務所が負担した。

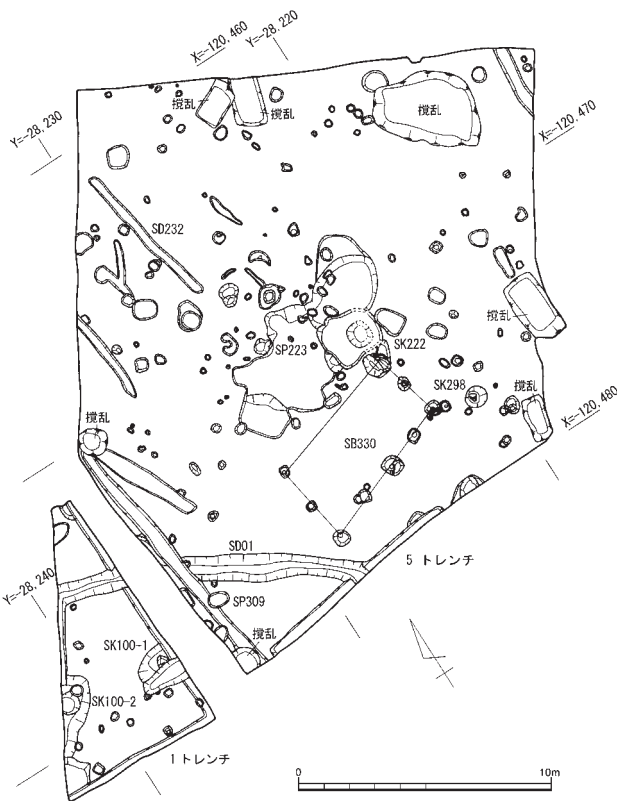
## 2. 調査概要

調査は、平成19年度に1～4トレンチ、平成20年度に5～8トレンチの調査を実施した(第2図)。本調査報告では、1～7トレンチまでの調査結果を載せている。8トレンチは多くの遺構・遺物を検出したため、次年度に報告することとする。また、3・5トレンチについては、土砂置き場の関係上2分割し、反転して調査を実施した。以下、年度ごとに調査結果を報告する。

### (1)平成19年度調査

調査地は農業用水路により分断されており、北から順に1～4トレンチを設定した。調査地の現状は、1・2トレンチは畑地、3トレンチは水田、4トレンチは駐車場跡地であり、多量の盛土が施されていた。重機により表土掘削を行い、遺物包含層確認後は、人力掘削により遺構検出に努めた。

調査地の基本層序(第3図)は、1トレンチ・2トレンチ東側断面をみると、北側には畑地に伴う表土が約0.3～0.5m程あり、その下は1トレンチでは淡茶褐色礫混じり土、2トレンチS B 180南端付近では、水田の床土に相当する淡黄灰色土がともに0.15mある。その下層は、部分的に茶褐色土系の遺物包含層が2層にわたり0.2～0.3m堆積し、上層が中世の遺構検出面となり、下層



第4図 1・5トレンチ平面図

は奈良時代・平安時代の遺物包含層となっている。包含層を除去すると、黄褐色粘質土の地山面となり、大半の遺構はこの面で検出した。3トレンチは、耕作土約0.15mを除去すると、薄い床土層が0.1m程あり、その下層には堅くしまった酸化物層が約3cmあり、その下が遺構検出面である地山面となる。4トレンチは、駐車場造成に伴う盛土を除去すると、削平を受けた地山面であった。調査地全体の遺構検出面は、西から東に緩やかに高くなる自然地形を成している。遺構の残存状況は、後世の削平が著しい3・4トレンチでは悪く、包含層が確認された1・2トレンチでは良好であった。遺構が希薄な部分は、削平により消滅したと考えられ、4トレンチの竪穴式住居跡の遺構残存深度が浅いのは、これを物語るものと考えられる。地山面は、黄褐色粘質土がベースとなるが、自然地形の起伏により部分的に段丘礫が露出したり、礫と黄褐色粘質土が混在する部分も認められた。遺構は黄褐色粘質土内に掘削されたものは深く、掘削途中で段丘礫にあたったものは浅い傾向が認められた。また、2トレンチで旧石器末～縄文時代初めと考えられる有茎尖頭器や、3トレンチで縄文時代中期後半の竪穴式住居跡が検出されたことにより、黄褐色粘質土下層での遺構の有無を確認するため、2・3トレンチにサブグリッドを設定し確認調査を行った。2・3トレンチ長軸の中央部分に3m間隔で2m四方のサブグリッドを各6か所、計

12か所設定し、面的に段丘礫まで人力掘削を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。

各トレンチごとに検出された遺構の概要を報告する。

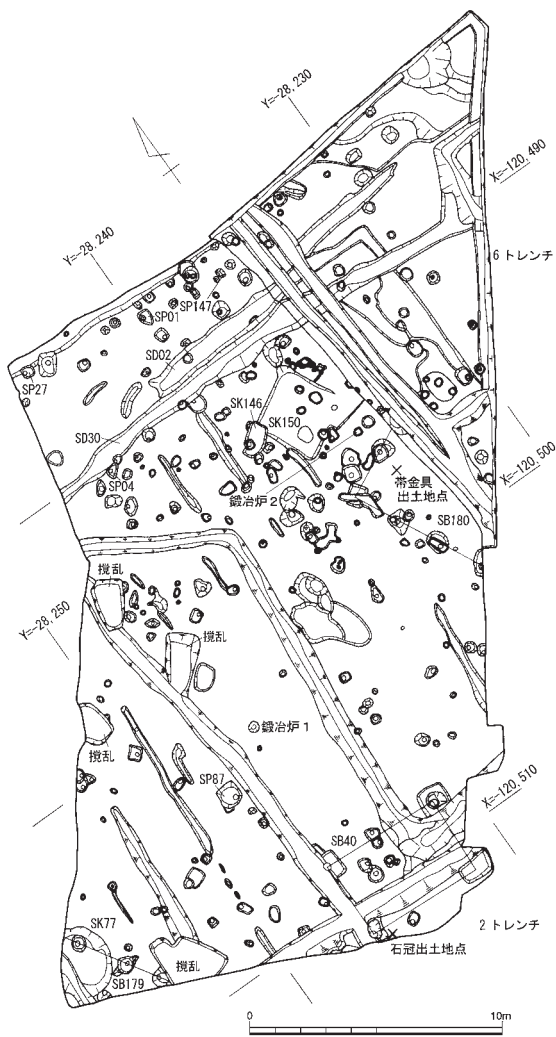
### 1) 検出遺構

検出された主な遺構としては、中世の溝・土坑・柱穴、長岡京期の掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴、飛鳥時代の竪穴式住居跡、時期不明の掘立柱建物跡、縄文時代の竪穴式住居跡などがある。数多く検出された柱穴には、根石が残るものも認められたが、建物跡を特定するまでには至らなかった。

#### ① 1トレンチ(第4図、図版第3)

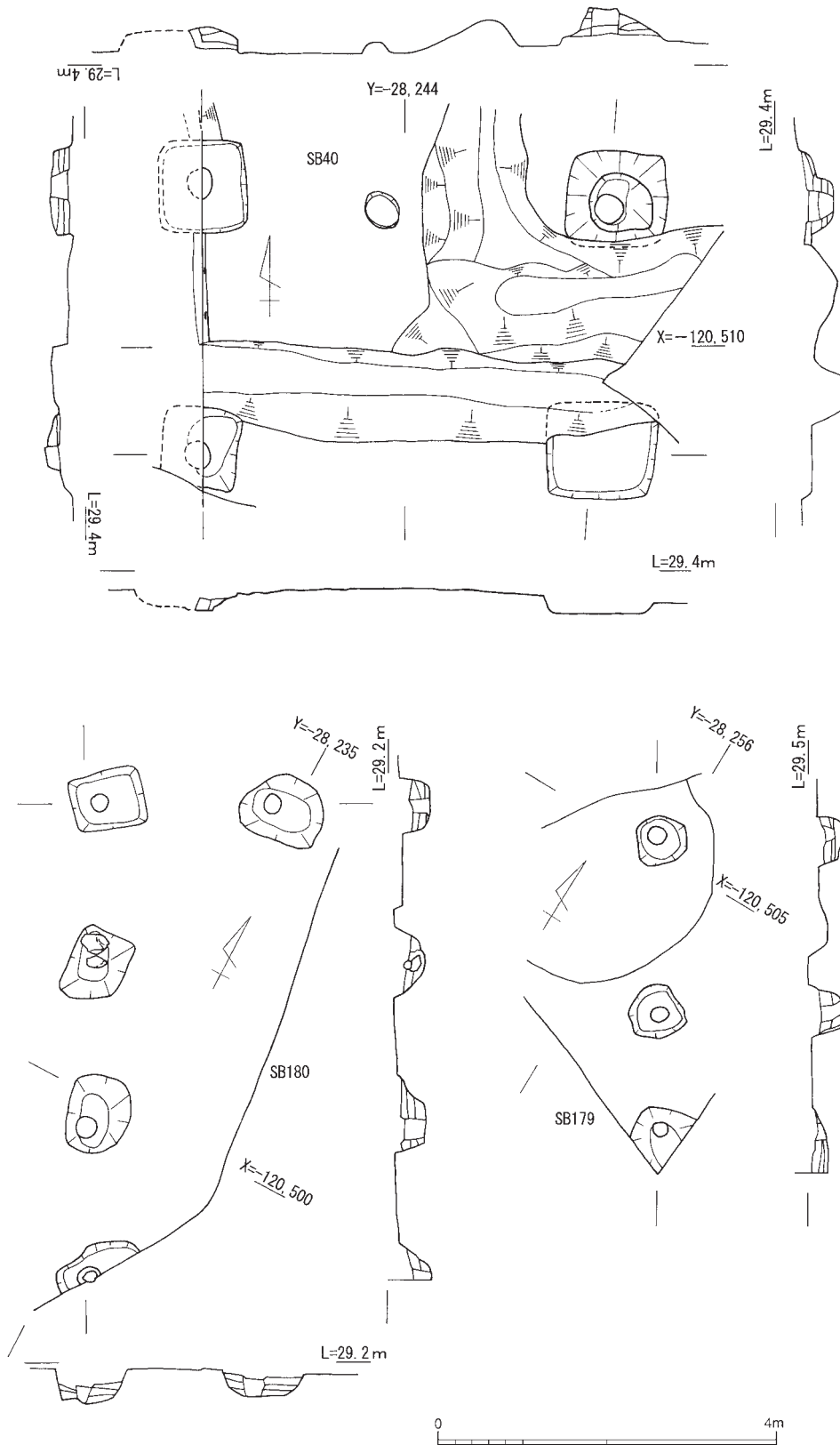
トレンチ中央部分で、東西に延びる溝とその南側で土坑および柱穴を検出した。

**溝 S D01(第4図、図版第3)** 1トレンチから5トレンチにかけて検出したもので、北西から南東方向に延びる。南側に溝状の落ち込み(S K100-1・2)を検出したため、これに挟まれる土塁状の遺構が想定されたが、S K100-1は5トレンチ側に延びないため、土塁



第5図 2・6トレンチ平面図

状の施設ではなく土坑であることが明らかとなった。S D01の延長部分は5トレンチで検出した。溝幅0.75~1.1m、深さ0.32~0.4mを測り、2.5m分を検出した。5トレンチも含めると全長9.5mを検出したことになる。内部埋土は暗黄灰褐色土・暗黒灰色土からなり、瓦器片が少量出土した。



第6図 掘立柱建物跡S B 40・179・180実測図

12～13世紀代と推定される。

土坑S K100-1(第4図、図版第3) 東壁で検出した楕円形の土坑で、長軸1.8m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。遺物は小片化した土師器が少量出土した。

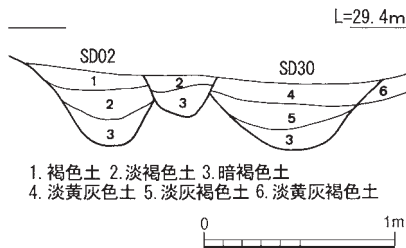
土坑S K100-2(第4図、図版第3) 西壁で検出した土坑である。1m×3.2m分を検出した。深さは0.7mを測り、断面形はレンズ状を呈する。遺物は小片化した土師器が少量出土した。土坑S K100-1・2とも溝S D01と同じ面より掘り込まれていることから、中世の遺構と考えられる。

②2トレンチ(第5図、図版第4)

トレンチ中央部分の南北、南端の東西を耕作に伴う溝や攪乱による削平を受けていたが、遺構の残存状況が良好なトレンチである。中央部東側には長岡京期以降の包含層も一部残存していた。検出された遺構には、掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴がある。南端の包含層中からは石冠、東側からは帯金具などの出土があった。

掘立柱建物跡S B40(第6図、図版第5) トレンチ南端で検出した。耕作に伴う溝などにより削平を受けるが、東西1間(4.9m)、南北1間(3.3m)の正方建物跡で、柱穴の掘形は一辺1～1.2m、深さ0.1～0.45mを測る。時期は長岡京期である。

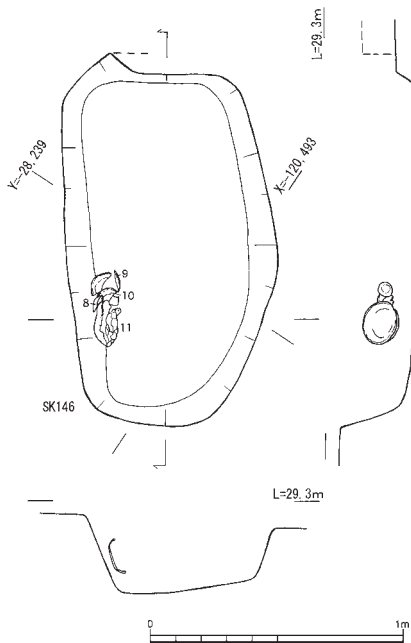
掘立柱建物跡S B179(第6図、図版第6) トレンチ南西端で2間分(3.65m)のみ検出した。



第7図 溝S D02・30断面図

柱穴の掘形は一辺0.6m、深さ0.18～0.42mを測る。主軸はN31°Wである。柱間寸法は2.15m、1.4mである。柱穴検出面で長岡京期の須恵器蓋が出土しているが、混入遺物の可能性がある。

掘立柱建物跡S B180(第6図、図版第7) トレンチ中央部の南東壁寄りで検出したもので、梁間1間(2.1m)、桁行3間(5.6m)を確認した。6トレンチ側に延びるものであるが、6トレンチ側の柱想定位置に、後世の耕作に伴う溝があり、柱穴が削平されたようで存在しない。また、これより南東方向に延びないため、2間×3間程度の建物が推定される。柱間寸法は梁間2.1m、桁行1.8m・2m・1.8mである。復元される規模は、梁間4.2m×桁行5.6mとなる。柱穴の掘形はほぼ方形で一辺0.6～0.9m、深さ0.38～0.5mを測る。掘形内には根石が残るものがある。主軸はN64°Eである。須恵器杯(第17図4)が柱穴検出面から出土したが、建物の時期を示すものとは考えにくい。



第8図 土坑S K146実測図

溝S D30(第5・7図、図版第4・6) トレンチ北端で検出した東西溝で、2・6トレンチ境付近では直線的でなく、北側に弓なりにやや張り出す。6トレンチではS D02

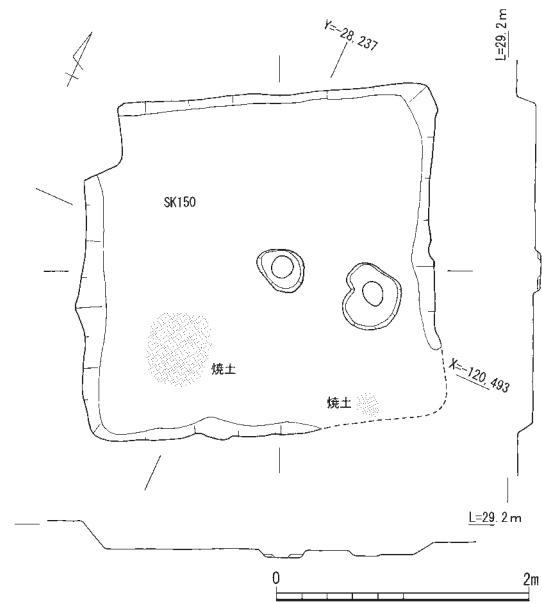
に先行する。溝幅0.4~1.1m、深さ0.38~0.5mを測り、11.5mを検出した。6トレンチを含めると19mとなる。溝の勾配は西から東に緩く下がる。削平を受けるためSD02と同一面より掘り込まれる。埋土は上から淡黄灰色土・淡灰褐色土・暗褐色土である。細片化した土師器が少量出土している。

溝SD02(第5・7図、図版第4・6) SD30に平行して検出した。6トレンチ延長部分では南側に直角に曲がる。溝幅0.4~1.0m、深さ0.05~0.4mを測り、6トレンチ側の南北方向の溝は浅くなる。区画溝と考えられ、2トレンチで東西5.7m、6トレンチで東西5m、南北7.5m分を検出した。溝の勾配は東西が西から東に、南北が北から南に緩く下がる。埋土は上から褐色土・淡褐色土・暗褐色土であり。内部埋土より長岡京期の土師器杯、土馬が出土した。

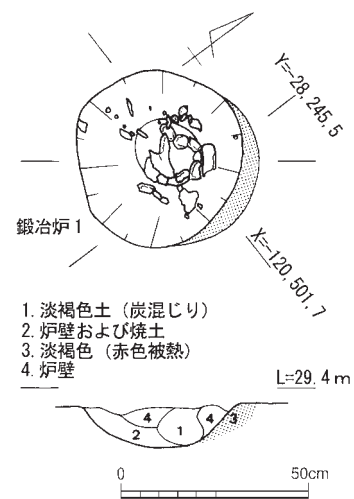
土坑SK146(第8図、図版第4) 2トレンチ北寄りで検出したもので、SK150と切り合う。長辺1.45m×短辺0.83m、深さ0.32mを測る長方形の掘形を有する。主軸はN56.5°Eである。土坑中央部北西壁に沿って土師器皿が5枚出土した。土坑の形状や遺物の出土状況から土坑墓と考えられるが、木棺等の痕跡は確認できなかった。12世紀後半~13世紀前半の時期が推定される。

土坑SK150(第9図、図版第6) 土坑SK146と西側が切り合いSK146に先行する。一辺2.7m、深さ0.28mの竪穴式住居状の掘形を持つ。中央部に直径0.35~0.4m、深さ0.13mの柱穴があり、その南側に径0.6m、東側に径0.2mの炭混じりの焼土が広がる。内部から土師器甕が出土している。奈良時代後半と考えられる。

鍛冶炉(第5・10図) 2トレンチの中央部で鍛冶炉1、SK150南側で鍛冶炉2を検出した。鍛冶炉1はほとんど破壊されており、径0.5m、深さ0.11mの掘形は認められたが、西側は破壊に伴う掘形のように、炉床裏側の被熱した部分は認められなかった。東側は、炉床裏側に赤色に被熱した部分が残存していた。内部は焼土や炉壁が混入していた。鍛冶炉2は、径0.5mほどの焼土の広がりのみである。フイゴ羽口の装着痕や鍛冶炉を覆う建物跡は、確認することができなかった。鍛冶炉1・2とも掘形内や周辺の土砂を採集・水洗い、磁石により内容物の採取を行ったところ、ともに鍛造剥片・粒状滓・小鉄片・小鉄塊が採取でき鍛冶炉であることが明らかとなっ



第9図 土坑SK150実測図



第10図 鍛冶炉1実測図

た。

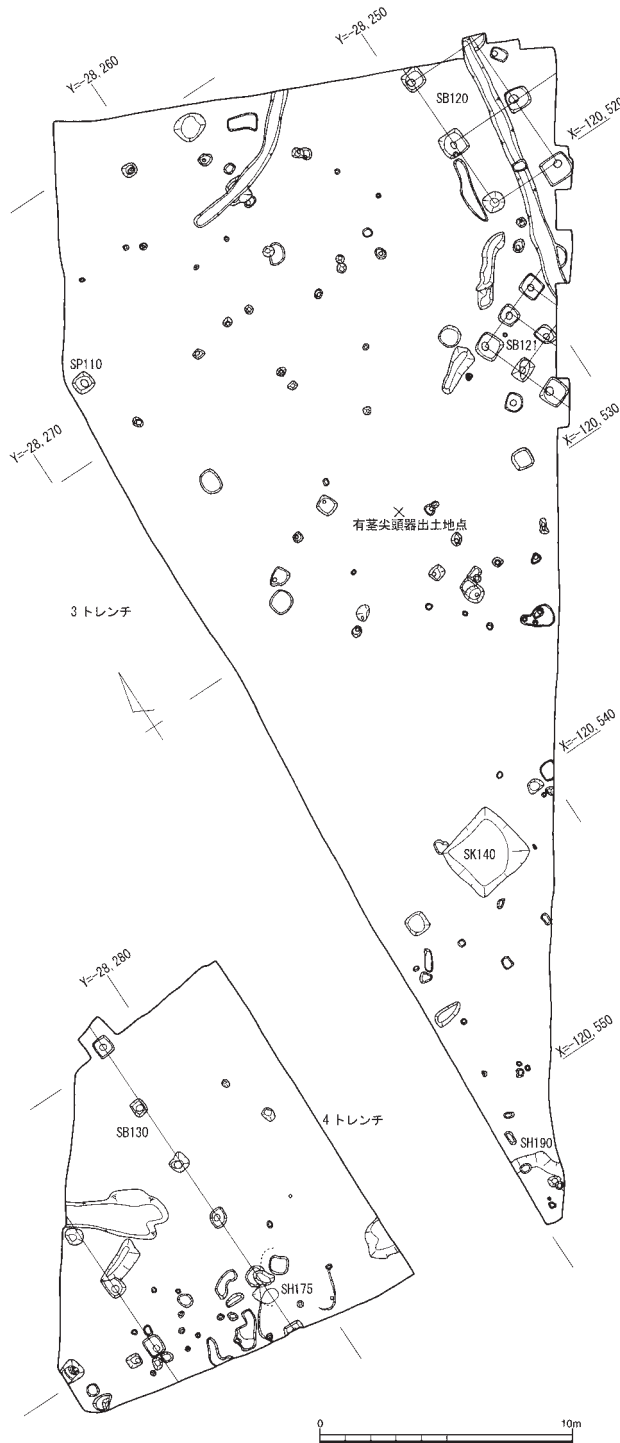
③ 3トレンチ(第11図、図版第4)

西側は削平によるためか遺構の密度が少なかったが、トレンチ東側では掘立柱建物跡、中央部で土坑、南端で竪穴式住居跡、全域で柱穴を検出した。また、中央付近の地山面上では有茎尖頭器が出土した。

掘立柱建物跡 S B 120(第12図、図版第7) トレンチ北端で検出した。南北2間(5.7m)、東西1間以上(3m以上)の正方位総柱建物跡である。柱穴の掘形は一辺0.7~1.1m、深さ0.3~0.38mの規模を測る。柱間寸法は梁間3m・2.7m、桁行3mの等間隔である。須恵器杯B(第17図22・23)が出土した。時期は、長岡京期である。

掘立柱建物跡 S B 121(第12図、図版第7・8) トレンチ中央部南東壁寄りで検出した。東西3間(4.6m)、南北2間(3.2m)以上の総柱建物跡と考えられる。主軸はN70°Eである。柱穴の掘形は、方形で一辺0.6~1m、深さ0.2~0.35mを測る。柱間寸法は梁間1.4m・1.8m、桁行1.5mの等間隔である。時期は不明である。

竪穴式住居跡 S H 190(第13図、図版第8・9) 南端で検出したもので、大半が調査地外になるものと思われる。不正形な円形ないし方形を成すと考えられ、明確な側壁を有さず、レンズ状に約20cm掘込まれる。7トレンチで住居の一端が検出されなかったため、5m程の規模が想定される。内部埋土は2層からなり、上層からは、焼土・炭に混じって細片化した縄文土器や叩き石・石錐が出土した。下層は、少量の縄文土器が出土した。出土遺物から縄文時代中期後半の時期が考えられる。この時期に相当する遺構・遺物は、南方の1段低い河岸段丘上の8トレンチから多量に出土している。



第11図 3・4トレンチ平面図

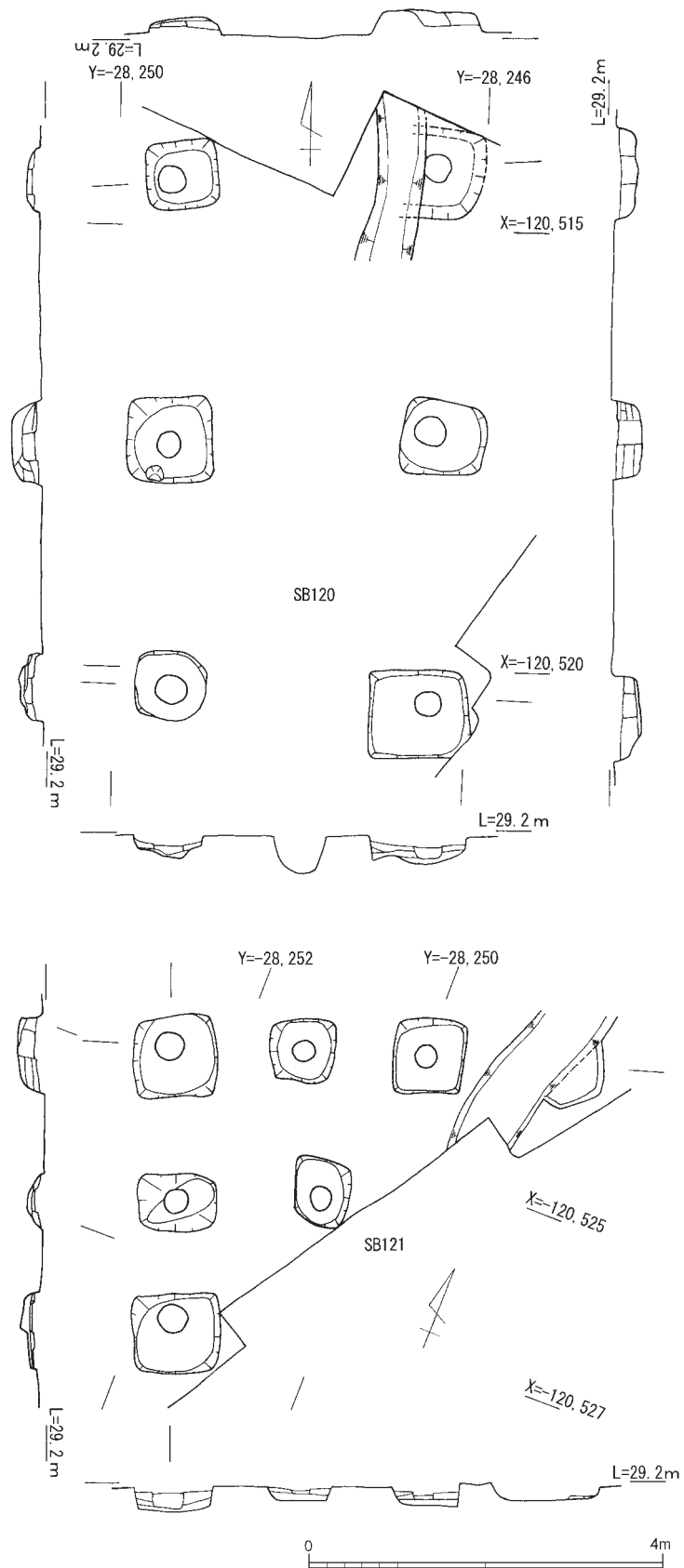


土坑SK140(第14図、図版第8)中央付近で検出した。一辺2.5×2.7mの方形の掘形を有し、深さ0.54mを測る。主軸はN14.5°Wである。規模から井戸を想定して掘削を行ったが、段丘礫に達した時点で掘削が中断されており、底面は中央部に礫が集中しており、これらとともに長岡京期に比定される須恵器・土師器、および縄文時代の石鏃が出土した。

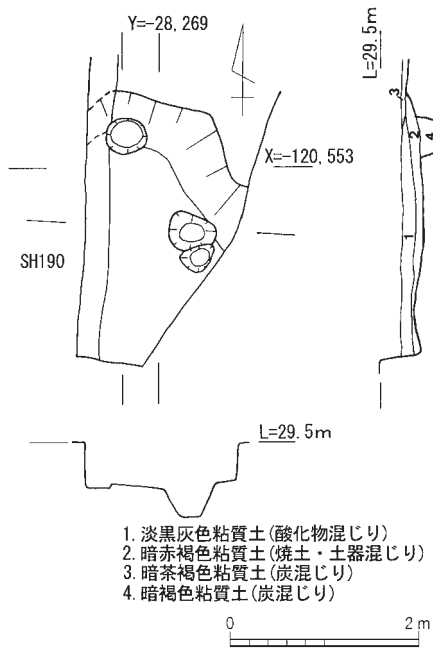
④4トレンチ(第11図、図版第9)

駐車場造成に伴い削平を受けており、全体的に遺構の残存状況は浅いものであった。検出された遺構は、掘立柱建物跡・竪穴式住居跡・柱穴である。

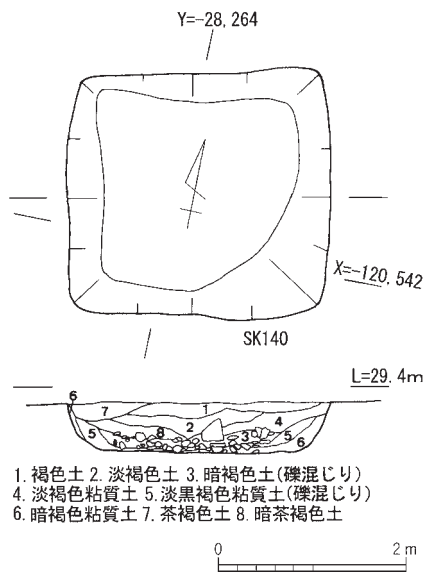
掘立柱建物跡SB130(第15図、図版第9)トレンチ中央部で検出した正方位建物跡である。妻部分を検出していないので確定はできないが、東西2間(5m)、南北4間(13.5m)以上の建物跡と考えられる。南北の柱間は2.7mの等間隔である。柱穴の掘形は方形で一辺0.6~0.8m、深さ0.1~0.3mを測る。南端は、7トレンチで検出されなかったため、検出された建物南端よりあと一間分延びるものと考えられ、5間以上の建物跡とも考えられる。遺物は出土しなかったが、SB40・SB120同様、正方位建物である



第12図 掘立柱建物跡SB120・121実測図



第13図 竪穴式住居跡 S H190実測図



第14図 土坑 S K140実測図

ことから、長岡京期と考えられる。

竪穴式住居跡 S H175 (第16図、図版第10) トレンチ南壁寄りで検出した。掘立柱建物跡 S B130に一部壊され、住居西壁の一部を検出したのみで、遺存状態が悪い。主柱穴は認められない。一辺約4mの竪穴式住居が復元される。西壁にカマドが存在していた痕跡を示す楕円形の焼土面を、東西0.8m、南北0.5mの範囲で検出した。西側掘込み側壁は0.15m確認した。西壁での主軸はN39°Eである。右京第70次調査で検出された住居跡も柱穴を有さず、規模的にも似ている。床面から須恵器蓋・甕が出土した。7世紀前半と考えられる。

## 2) 出土遺物

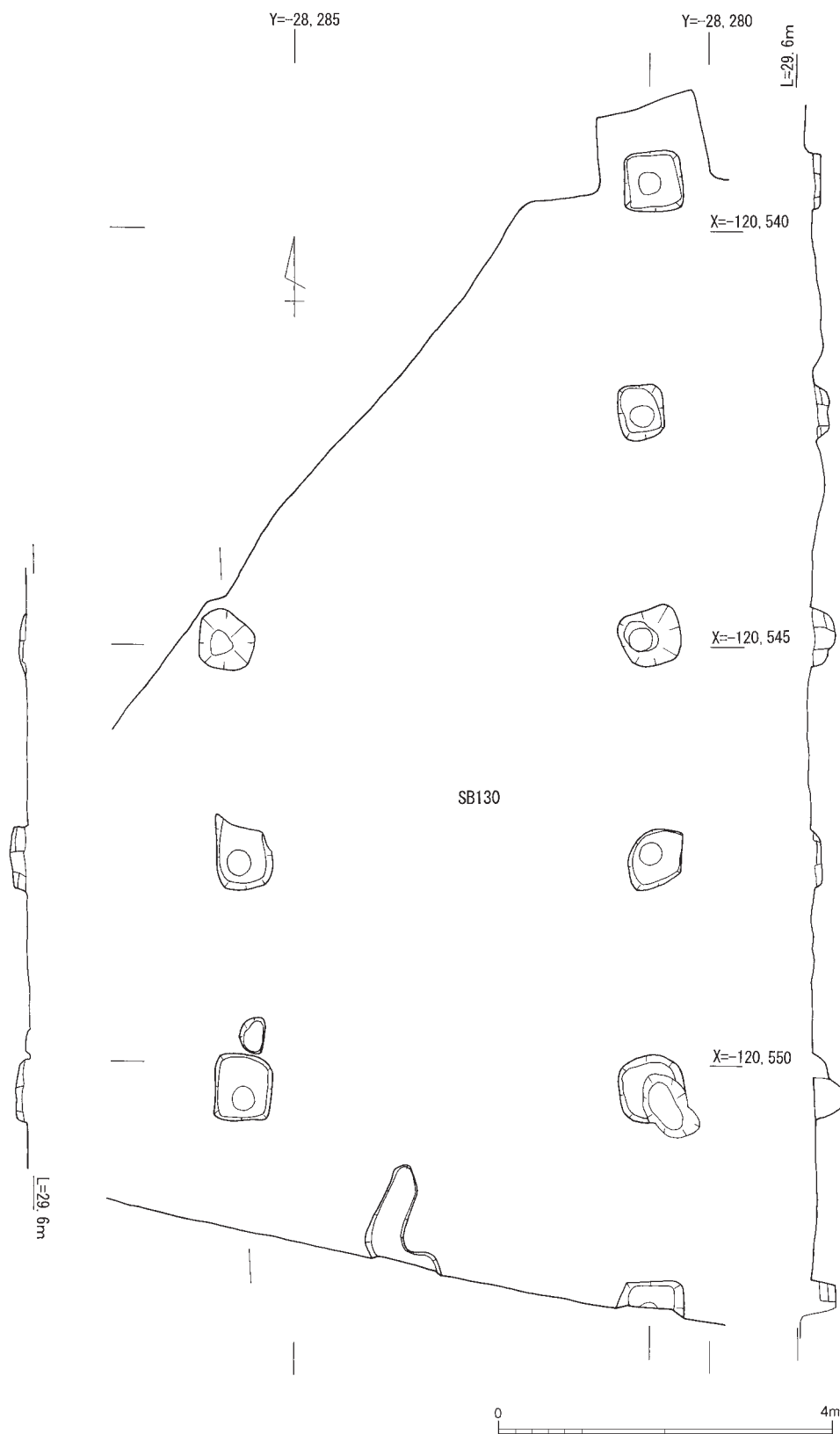
平成19年度調査で出土した遺物には、縄文土器・須恵器・土師器・瓦・土馬・フイゴ羽口・石器・石製品・金属製品・鍛冶生産関連遺物などがある。

### ①遺構出土遺物(第17図、図版第17・18)

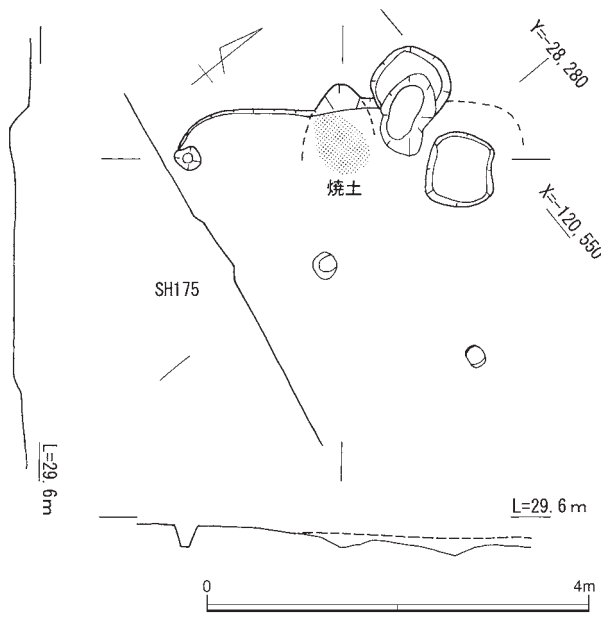
1・2・3は須恵器杯B蓋である。1は、2トレンチ S P87から出土した。内面にかえりが付き、宝珠つまみがつくものである。2・3は、宝珠つまみがつくが、内面にかえりは付かない。2は2トレンチ S P01から、3は S B179柱穴検出面から出土した。4は須恵器杯である。口径12.4cm、器高4.05cm。 S B180から出土した。5は、須恵器杯Bで S B40から出土した。高台の位置が底部と体部の屈曲部のやや内側にある。奈良時代後半～長岡京期。6～11は土師器皿で S K146から出土した。いずれも完形品で、6～10は、体部外面上半はナデ、下半はユビオサエ、11は内面にミガキの痕跡が残る。6～10は、口径9.3～9.4cm、器高1.45～2.05cm。11は、口径14.4cm、器高3.1cm。色調は明茶褐色である。12世紀後半～13世紀前半の時期が推定される。12・13は、土師器杯である。12は2トレンチ S P01から出土した。口径13.4cmで小振りである。口縁部はナデ、体部はミガキが残る。色調は茶褐色である。13は、 S D02から出土した。内外面ともヨコナデを施す。口径17cm。14は、 S D02から出土した土馬である。前両脚と後右脚・頭部を欠損する。色調は茶褐色である。15は、 S P01から出土した須恵質風字硯の破片である。使用痕が残る部分は黒色に変化している。16は、土師器甕である。 S K150から出土した。奈良時代後半である。17は、フイゴ羽口である。先端付近は高熱により青灰色に変色する。2トレンチ S P27から出土した。18は2トレンチ S P04から出土した、緑色凝灰岩の玉の

ことからの、長岡京期と考えられる。

原石である。軟質のもので、緑灰白色を呈する。所属時期は不明であるが、右京第943次調査では火葬骨埋納土壙から碧玉が出土しており、縄文時代に属する可能性もある。19は、S B175柱穴内から出土した砥石である。砥面は4面で淡黄褐色である。残存長7cm、残存幅4cm、である。



第15図 掘立柱建物跡S B130実測図



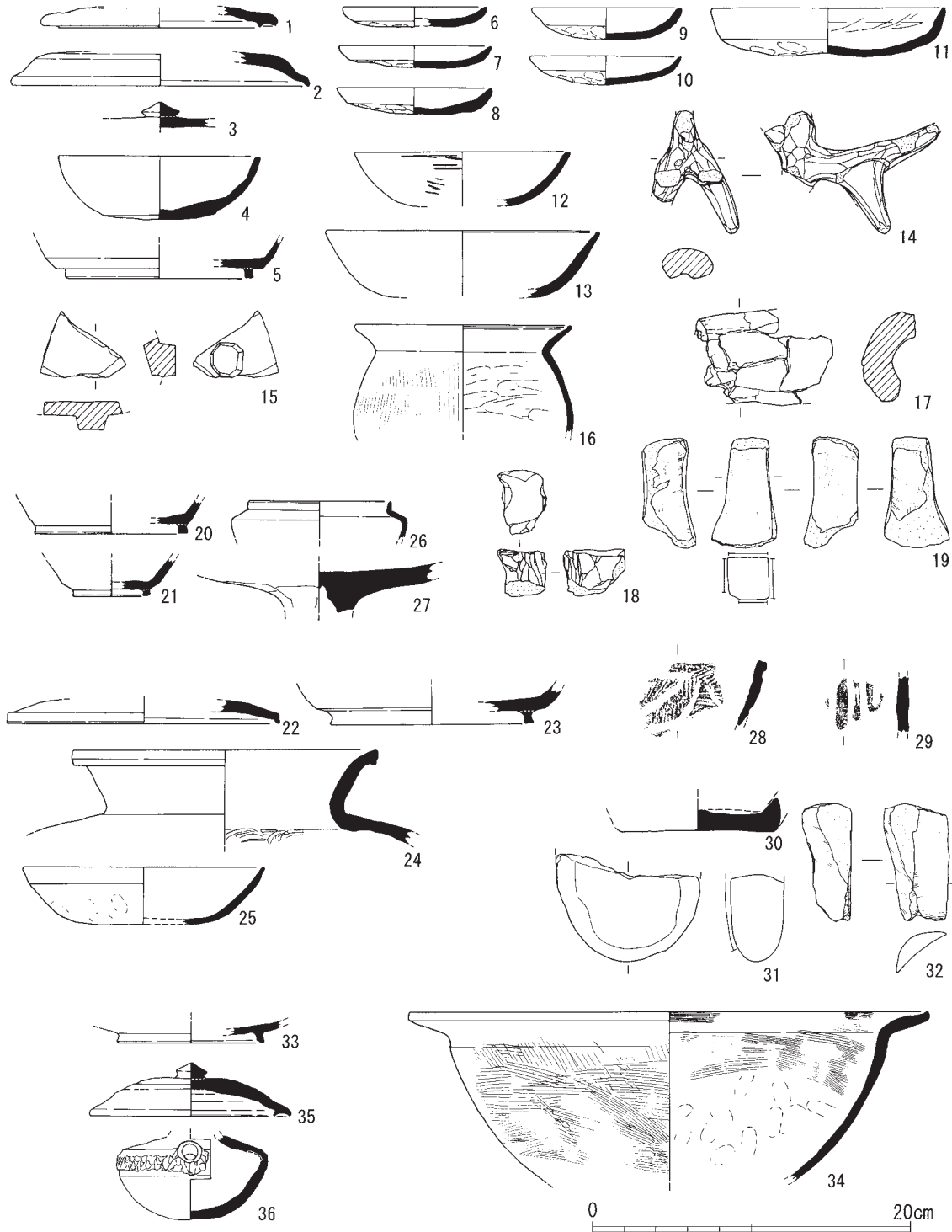
第16図 竪穴式住居跡SH175実測図

りをすると思われる。28～32はSH190から出土した。28～30は縄文土器深鉢で同一個体と思われる。28は口縁下の文様帯、29は体部中位部分の破片で縦方向の沈線がみられる。30は底部片である。31は、花崗岩質砂岩製の磨石で1/2が残存する。32は砂岩製の石器と考えられるが、研磨面のみで用途は不明である。これらの遺物は縄文時代中期と考えられる。33・34は2トレンチSP147から出土した。33は、施釉陶器碗である。貼り付け高台で、内面に施釉され灰緑褐色に発色する。高台の一部にも釉が付着している。平安時代前期。34は、土師器鍋である。口縁はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面上半ハケメ、下半はナデ仕上げを施す。口径32.4cm、色調は茶褐色である。35・36は竪穴式住居跡SH175から出土した。35は杯蓋Bで内面に返りを有し、宝珠つまみをもつ。口径11.4cm、器高3.4cmの完形品である。飛鳥時代。36は甗で、体部のみのもので、頸部と体部を意識的に欠損させた痕跡が認められる。肩部に2条の沈線をめぐらせ、その間に櫛描波状文を入れる。孔は斜め上方に約3.5mm注口状に突出している。古墳時代後期。

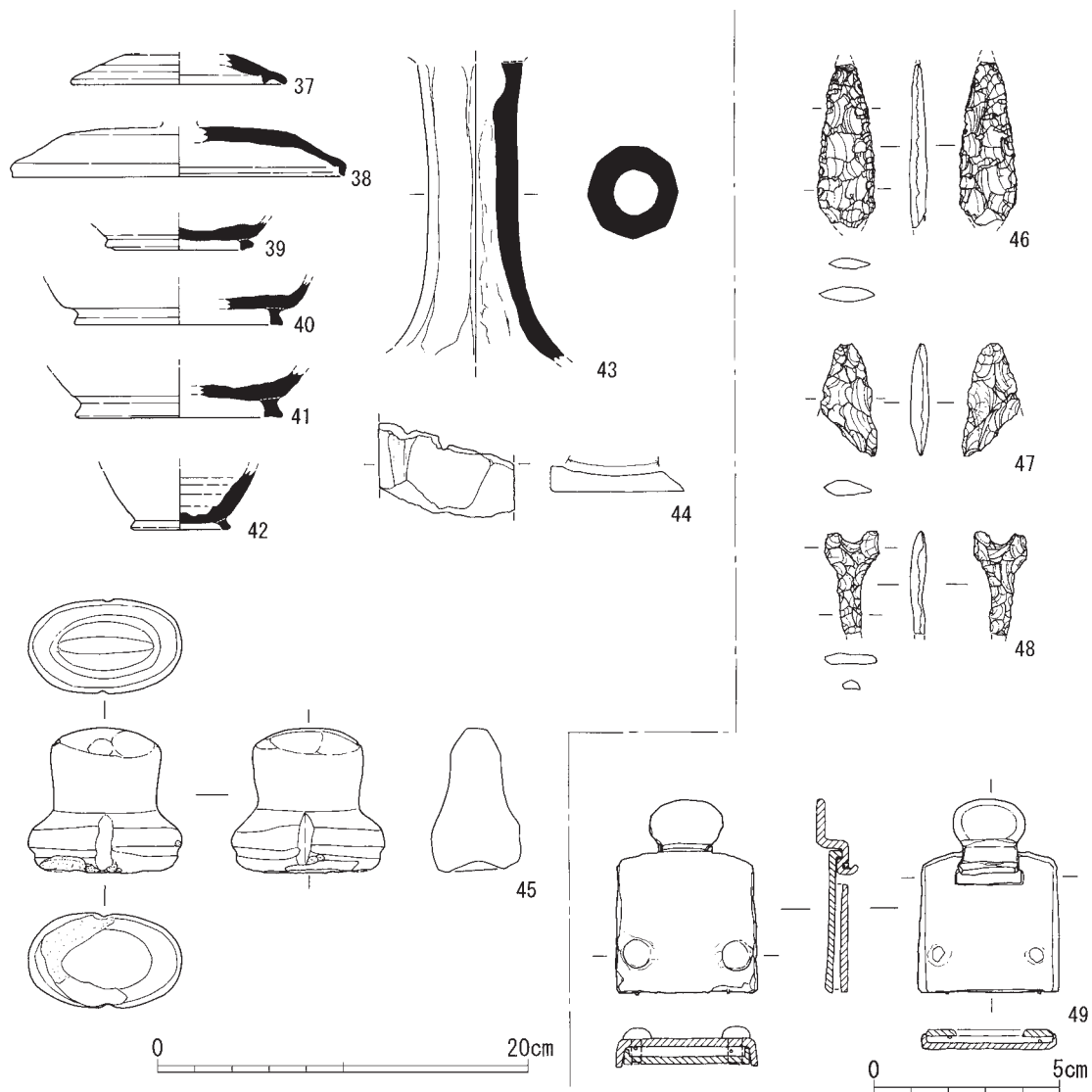
②包含層出土遺物(第18図、図版第18)

37～46は包含層出土のものである。37・38は須恵器杯B蓋である。37は宝珠つまみがつき、内面にかえりが付く。38は内面にかえりが付かない。39～41は杯Bである。内外面とも回転ナデを施す。42は、須恵器壺L底部である。40は高台が底部内寄りに付されるが、ほかは屈曲部付近に高台を付す。43は、土師器高杯である。大型品であり、筒部は9面の面取りを施す。44は、粘板岩製硯片である。45は石冠である。火成岩製で、高さ8.4cm、幅8.4cm、厚さ4.9cm、重量305g。全体が丁寧に磨かれている。頭部は斧形に面取りし、下半は全周に幅6mm、深さ1.5～2mmの線刻がめぐり、広端面中央に縦に幅6～8mm、深さ2～3mmの紡錘形の凹みが刻まれる。基部底面は、レンズ状に4～4.5mm凹む。一部剥離後に再研磨した痕跡が認められる。また、赤色顔料が付着したような痕跡も残り、全体に塗布されていた可能性もある。上下に斧と凹みにより、両性

具有を表現したように見える。46は、3トレンチ黄褐色粘質土上の地山面で検出した有茎尖頭器である。小型のもので、先端と基部の一部を欠く。現存長4.4cm、幅1.6cm、厚さ4mm、重さ3.5gである。明瞭な茎部を持たないものである。石材は赤みがあったチャートである。身部断面は二等辺三角形を成し、丁寧な押圧剥離により調整される。47は、S K140から出土した凹基式無茎石鏃である。一部欠損するが、長さ3.05cm、幅1.5cm、厚さ0.45cm、重さ1.8g。サヌカイト製



第17図 出土遺物実測図(1)



第18図 出土遺物実測図(2)

である。48は、S D176から出土した石錐である。先端を欠損するが長さ2.8cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ1.2g。サヌカイト製である。49は、鉄地銀装の帯金具である。方形の箱状の鉄板2枚で皮帯を挟み込み、金銅の鉾2本で綴じる。皮帯の縫いしろには、針金を縫い込んでいたようで、2本の針金が残存する。裏側の箱状の板には窓があり、吊り手状のものが挟み込まれている。鉾を除き帯金具全体が、銀装である。時期はわからない。

## (2)平成20年度調査

トレンチ名は、平成19年度調査トレンチに続けた。調査地は1トレンチ東側(5トレンチ)、2トレンチ東側(6トレンチ)、4トレンチ南側(7トレンチ)である。平成19年度調査同様、6トレンチを除いて、農業用水路や里道により分断されており、トレンチを接合することはできなかった。調査前の状況は、5トレンチが公園・建物跡地、6トレンチが駐車場跡地、7トレンチは水田であった。調査は重機により表土を除去し、遺物包含層確認後は、人力掘削により遺構検出に

努めた。

### 1) 検出遺構

検出された主な遺構としては、中世の掘立柱建物跡・溝・土坑・柱穴、長岡京期の溝・土坑・柱穴がある。数多く検出された柱穴は、建物跡を特定するまでには至らなかった。

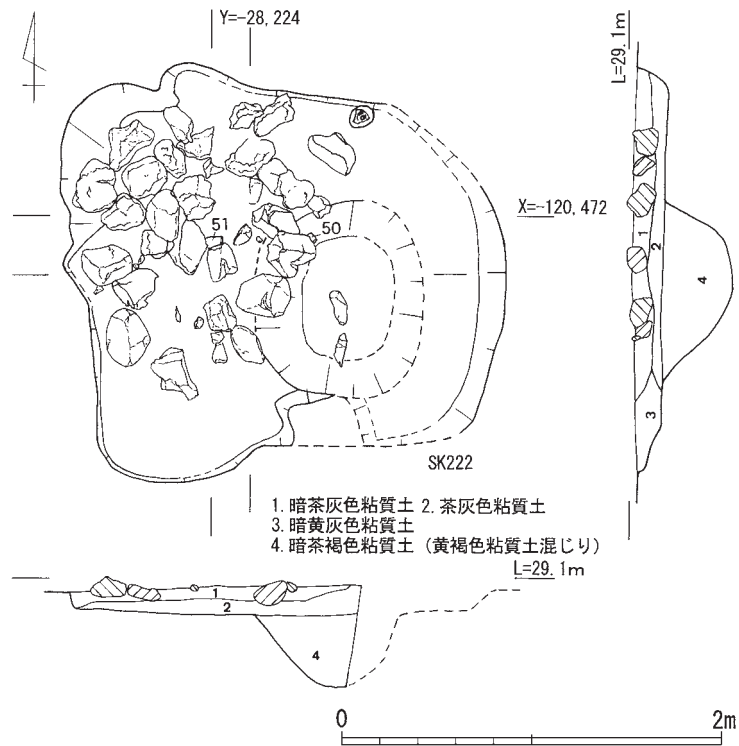
**基本層序(第3図)** 各トレンチとも隣接する平成19年度調査トレンチと同様な堆積状況をなしているが、5トレンチは遊具や建物基礎により攪乱を受ける部分が認められた。6トレンチは駐車場表土下に旧耕作土・床土があり、その下層は黄褐色粘質土の地山面となるが、部分的に薄く遺物包含層が残る所も見られた。7トレンチは耕作土を除去すると、約3cmの酸化物層があり、その下は地山面となる。また、南西側は低位段丘の台地の端にあたり、自然地形が傾斜し始める部分に位置する。各トレンチごとに検出された遺構の概要を報告する。

#### ① 5トレンチ(第4図、図版第11)

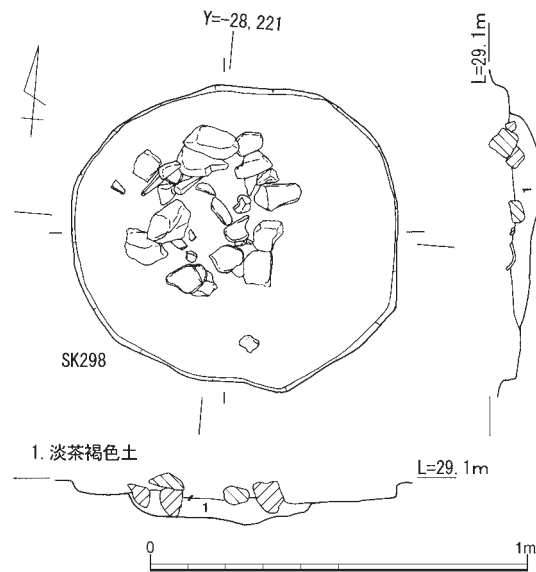
攪乱や削平を受け遺構の残存状況は良くなかったが、検出された主な遺構として、中世の土坑・溝・柱穴、平安時代掘立柱建物跡・柱穴などがある。

**溝SD01(第4図、図版第12)** 南端より1トレンチの延長部7mを検出した。溝幅0.7~1m、深さ0.36mを測る。6トレンチ側に延長部が認められないため、5・6トレンチ間の未調査部分に通じているものと思われる。

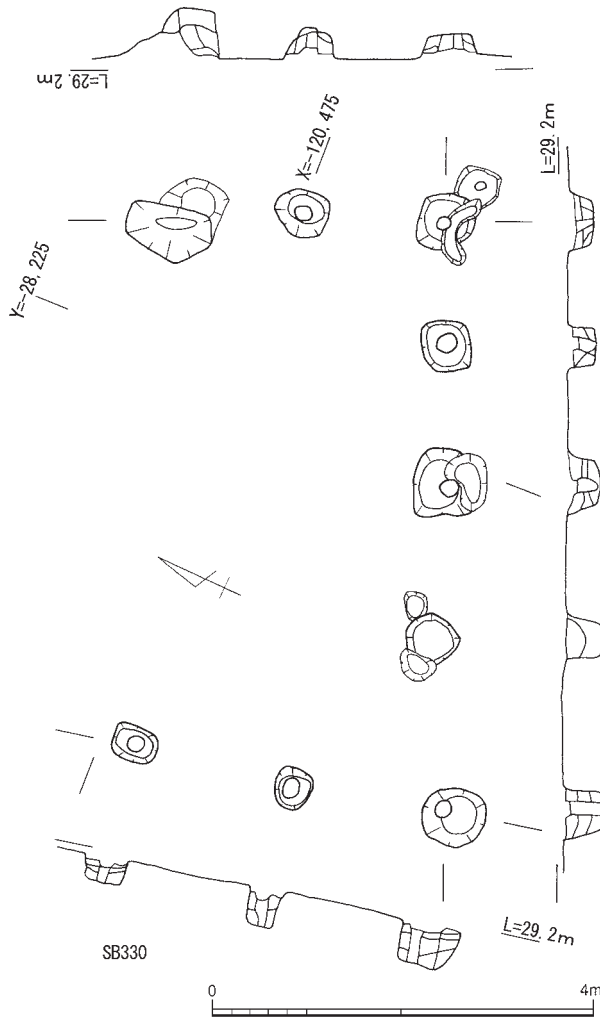
**土坑SK222(第19図、図版第12)** 5トレンチ中央部で検出した。一辺2.3×2.1m、深さ0.15mを測るほぼ方形の掘形を有する。検出面上の土坑西寄りの1.5m四方に径0.1~0.3m程の礫が集中している。土坑底面中央より東寄りが柱穴状に長径1m×短径0.9m、深さ0.37mの楕円形状に掘



第19図 土坑SK222実測図



第20図 土坑SK298実測図



第21図 掘立柱建物跡S B330実測図

は基本的には円形であるが、隅丸方形に近い円形のものもある。直径ないし一辺0.35～0.8m、深さ0.3～0.58mを測る。柱穴内より土師器・黒色土器片が出土した。平安時代前期と推定される。

②6トレンチ(第5図、図版第13・14)

2トレンチ寄りを南北に延びる耕作に伴う溝は、東側は攪乱により削平を受けている。検出された遺構は溝・土坑・柱穴などがあるが、時期を特定できないものが多い。

溝SD30(第5・7図、図版第13・14) 2トレンチの延長部であり、SD02を切る東西溝である。溝幅0.7m、深さ0.22～0.39m、長さ7.5mを検出した。東端は攪乱により削平を受ける。

溝SD02(第5・7図、図版第13・14) 2トレンチのSD02の延長部分である区画溝と考えられる。2トレンチから続く東西溝が6トレンチで南に屈曲する。東西5m、南北7.5m分を検出したので、2トレンチで検出した分と合わせて東西は総長10.7mを測る。南北部分は幅0.4m～0.5m、深さ0.05mを測り、北から南に緩く傾斜する。長岡京期である。

③7トレンチ(第22図、図版第14・15)

表土直下が遺構面であり、遺構の残存状況は浅いものであったが、中世の土坑、長岡京期の廃棄土坑・溝・柱穴を検出した。

り込まれる。この中には礫は含まれない。検出面の礫に混じって黒色土器碗・土師器羽釜が出土した。13世紀代と推定される。改葬に伴う廃墓と考えられる。

土坑SK298(第20図、図版第13) 5トレンチ南東寄りで検出した。長径1.7m×短径1.6m、深さ0.1mを測る楕円形土坑である。土坑中央に径1mほどの範囲に径5～15cmの礫が集中する。礫の下は短径0.9m×長径1.2m、深さ0.15mの楕円形状に掘り込まれる。この中には礫は含まれない。礫に混じって瓦器片が少量出土した。13世紀代と推定される。SK222同様、改葬に伴う廃墓と考えられる。

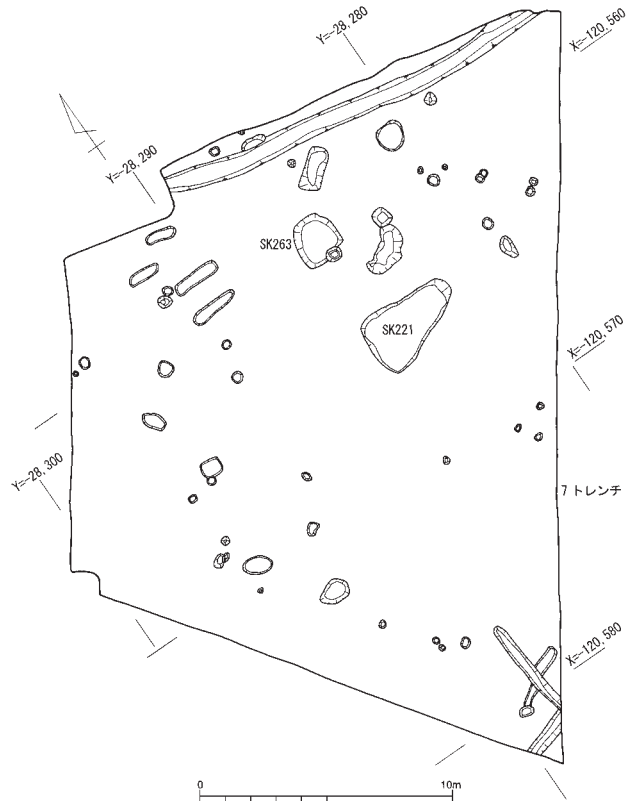
掘立柱建物跡SB330(第21図、図版第12) 5トレンチ中央部で検出した、平面形のいびつな建物跡である。南北2間(西側3.3m、東側3m)、東西4間(6.2m)を測る。北側桁行は、反転調査を行った際の境界部分に当たり、削平してしまったのか確認できなかった。主軸はN68°Eである。掘形



土坑S X 263(第23図、図版第15) 7トレンチ北寄りで検出した。一辺1.9×1.75m、深さ0.3mを測るやや台形状の掘形を有する。土坑内中位に径5~20cm程の礫が北寄りに1×1.5mの範囲に集中する。土坑底面は、レンズ状に凹む。5トレンチの土坑S K 222やS K 298のような1段下がる掘り込みはない。礫に混じって古墳時代、長岡京期の土器・瓦を中心に少量の土師器小皿片が出土した。中世と考えられる。S X 222・298同様、改葬に伴う廃墓の可能性が高い。

土坑S K 221(第24図、図版第15・16)

7トレンチ中央部で検出した。平面形は、縦長の台形状を呈し、西側が広く東側が狭い。長さ4m×広端辺長2.5m・狭端辺長0.8m、深さ0.25mを測る。土坑内からは、長岡京期の須恵器・土師器・瓦に混じって、縄文時代の石鎌・磨石、古墳時代後期の須恵器が出土した。出土状況から、長岡京期の廃棄土坑と考えられる。



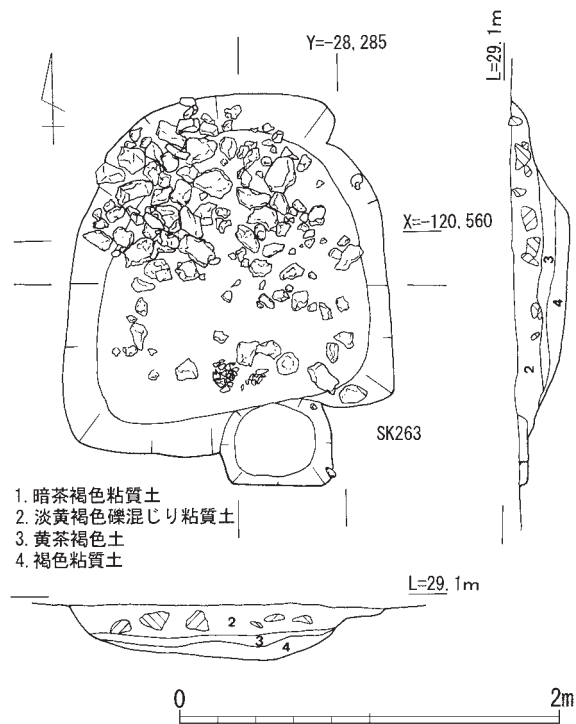
第22図 7トレンチ平面図

## 2) 出土遺物

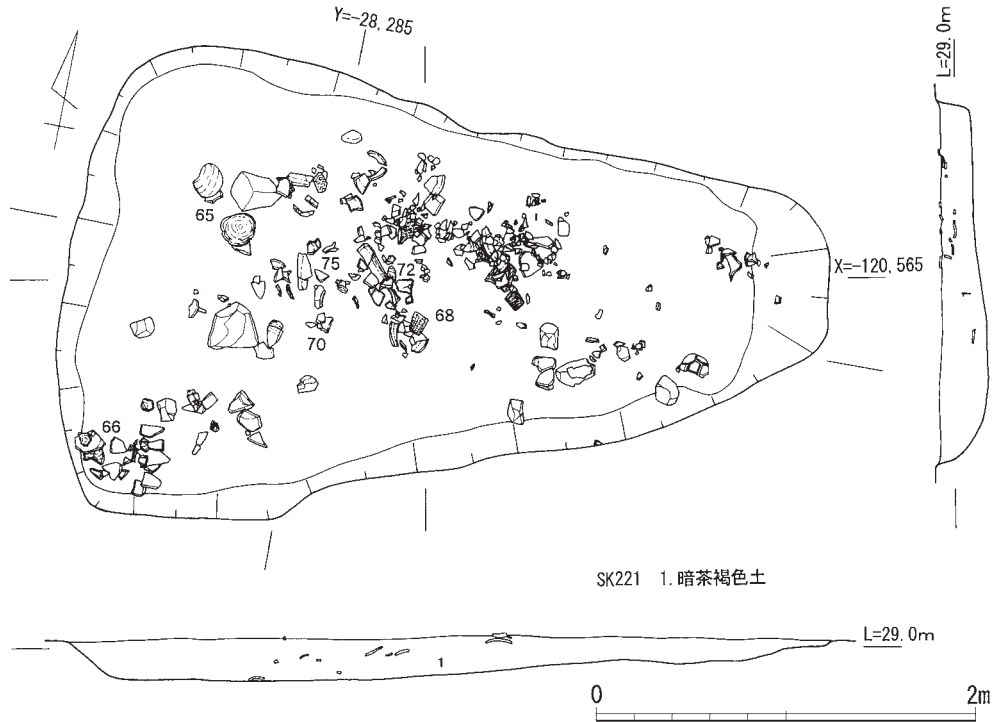
平成20年度調査で出土した遺物には、須恵器・土師器・黒色土器・瓦・製塩土器・土馬・石器などがある。

①遺構出土遺物(第25・26図、図版第17)

50・52は、黒色土器椀である。内外面とも黒色処理をする。50は底部片であるが、見込み部分に密なミガキが施される。52は、内外面・見込み部分とも密なミガキを施しているが、遺存状態がやや悪い。口径15cm、器高6cmを測る。50はS K 222、52はS P 309から出土した。10世紀後半~11世紀と推定される。51は、土師器羽釜である。浅い桶状の体部に小さく突出する鐙をつけたものである。外面は、鐙以下がユビオサエ、鐙下方に煤が付着

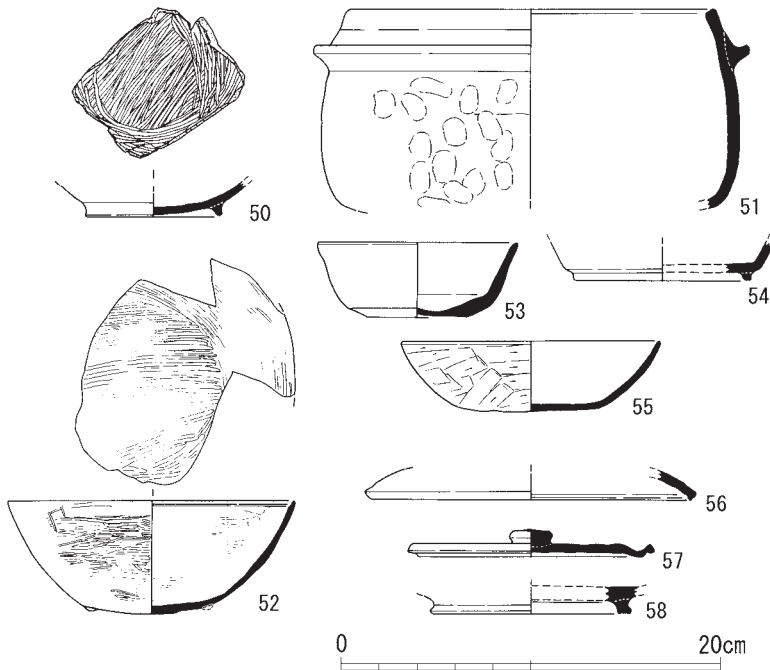


第23図 土坑S K 263実測図



第24図 土坑SK221実測図

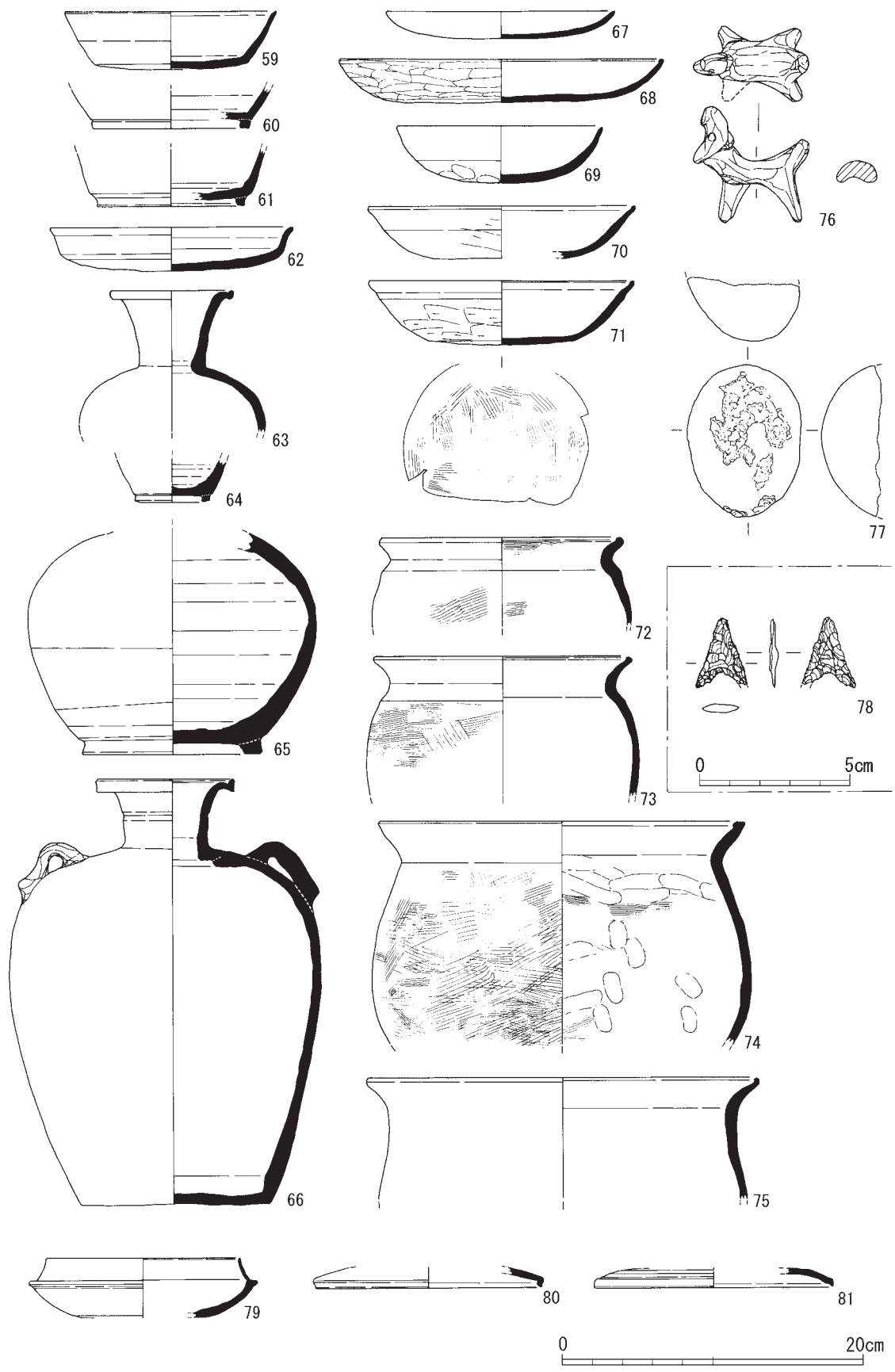
している。内面はナデ調整する。13世紀中頃と考えられる。口径19.1cm。SK222から出土した。53・54は、須恵器杯である。53は、小型で古墳時代後期後半の杯で、底部はヘラケズリ後ナデ調整する。口径10.4cm、器高3.9cm、色調は暗青灰色である。SK230から出土した。54は、高台が底部端に付される。内外面とも回転ナデである。SP223から出土した。55は、土師器杯である。外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。口径13.6cm、器高3.7cm、色調は茶褐色である。SD232から出土した。56・57は、須恵器杯B蓋である。57は擬宝珠状のつまみをもつ杯蓋である。



第25図 出土遺物実測図(3)

天井部外面はヘラケズリ、他は回転ナデである。口径13cm、器高1.45cm。色調は暗青灰色である。奈良時代末期～平安時代初期。58は須恵器杯Bである。底部の破片で、色調は青灰色である。

59～75はSK221から出土した。59は須恵器杯A、60・61須恵器杯Bである。59は、底部ヘラケズリ、内外面とも回転ナデである。口径13.9cm、器高3.9cmである。

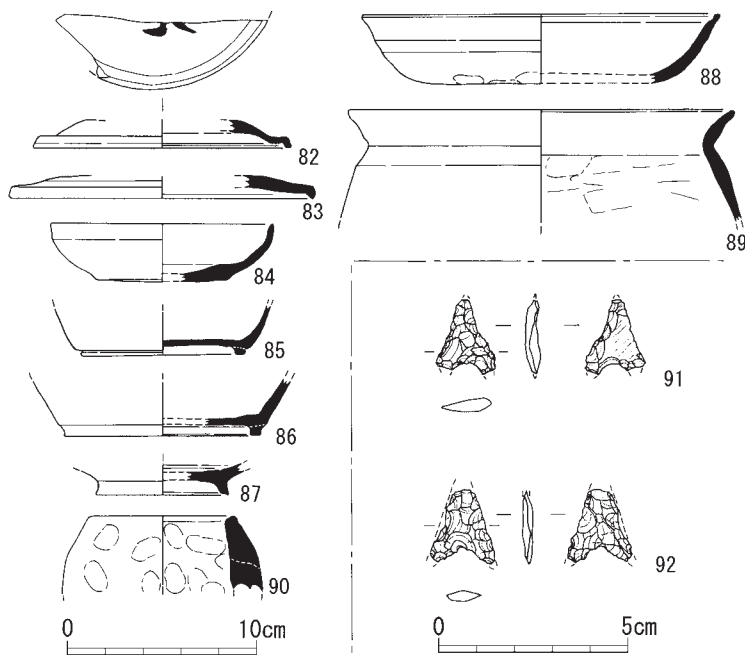


第26図 出土遺物実測図(4)

色調は明青灰色である。60・61は底部端に貼り付け高台が付される。内外面とも回転ナデである。底部はヘラケズリである。62は、須恵器皿である。口径16cm、器高2.9cm、色調は明青灰色である。底部外面はヘラ切り、他は回転ナデを施す。63～66は、須恵器壺である。64・65は高台が底部端に付される。64は、底部に糸切りの痕跡が残る。66は、双耳壺で肩部に退化した把手を取り付けている。内外面とも回転ナデ仕上げ。色調は暗青灰色である。外部全体に自然釉が付着する。67・68は土師器皿である。67は口径21.4cm、器高2.95cm、色調は茶褐色である。68は外面の全面にヘラケズリを施す。69～71は、土師器杯である。69は、口縁部ヨコナデ、体部下半ナデ仕上げ。色調は茶褐色である。口径13.6cm、器高3.8cmである。70・71は口縁部ヨコナデ、他はヘラケズリ、内面はナデを施す。色調は赤茶褐色である。72～75土師器甕である。口縁部はヨコナデ、体部外面はハケメ、内面は口縁部ヨコナデ調整。72は口径15.7cm、74は口径24cmである。76は、土馬である。左前脚のみ欠損する。77は花崗岩質砂岩製の敲石である。78は、一部欠損する凹基式無茎石鏃である。長さ2.35cm、幅1.75cm、厚さ0.25cm、重さ0.6g。サヌカイト製である。これらの遺物は、石器を除き長岡京期である。79～81はS X263から出土した。79は須恵器杯身である。色調は灰色で、底部外面はヘラケズリ、他は回転ナデを施す。口径12.8cm、器高3.8cm。古墳時代後期。80・81は須恵器蓋Aで口縁端部を内側に巻き込む。8世紀後半。

②包含層出土遺物(第27図)

82・83は須恵器蓋である。82は、天井部外面に墨書が認められるが、判読できない。奈良時代後期～長岡京期。83は、須恵器杯B蓋で天井部ヘラ切り、内外面とも回転ナデである。84は、須恵器杯である。天地は不明である。底部はヘラ切り、他は回転ナデである。85・86は須恵器付Bである。いずれも高台が底部端近くに付される。87は、緑釉陶器碗で削出し高台で、胎土は明灰色、釉は緑褐色に発色する。11～12世紀。88は、土師器杯で口縁部はヨコナデ、外面底部付近は



ユビオサエ、内面はナデである。口径18.8cm。89は、土師器甕で口径20.2cmである。摩滅が著しい。90は、製塩土器である。上半のみ遺存し外面はナデ、内面はユビオサエである。体部に比して口径が狭く、厚さが1.5cmあり分厚い。胎土に長石・石英を含む。色調は茶褐色である。91・92は、凹基式石鏃である。一部欠損するが、91は長さ1.95cm、幅1.5cm、厚さ0.35cm、重さ0.9g。92は長さ1.95cm、幅1.7cm、厚

第27図 出土遺物実測図(5)

さ0.25cm、重さ0.7g。サヌカイト製である。

### 3. まとめ

今回の調査成果について簡単にまとめておく。有茎尖頭器は地山直上で出土したものであるが、周辺では同じ台地上に立地する下海印寺遺跡、右京第70次調査でも出土しており、旧石器時代末～縄文時代初めにかけての遺跡が広範囲に広がっていることを示唆するものである。

3トレンチ南端で検出した縄文時代中期の竪穴式住居SH190は、8トレンチ周辺で行われた河岸段丘上の調査で、縄文時代中期末～後期後葉にかけての遺物や竪穴式住居跡・土抗が多く検出されており、台地上にも集落が広がっていることが明らかとなった。また、縄文時代晩期と考えられる石冠は、京都府下では2例目の出土であり、その分布は中部地方を中心として出土するもので、地域間交流があったことを示すとともに、周辺に当該時期の遺構の存在を示唆する。

飛鳥時代の竪穴式住居跡や包含層出土の遺物などからすると、右京第70次調査で検出された竪穴式住居跡と同時期のものであり、今後集落の範囲が広がっていくものと考えられる。8トレンチ周辺では6世紀前半～中頃の住居跡が検出されているが、6世紀後半以降の住居跡は認められない。6世紀後半になると、集落は北方の台地上に移動した可能性も考えられる。

調査地周辺では、平安時代～鎌倉時代の遺構遺物が多く検出されたが、これらに比べると長岡京期の遺構・遺物はやや少ない状況であった。今回の調査で検出された建物跡については、正方位を示すもので今後、長岡京の土地利用を考える上で重要な資料となる。また、同時期の土馬が出土したことや廃棄土抗の存在など、周辺部にも長岡京に関する遺構が広がっている可能性がある。

時期不明の建物跡SB179・180に関しては方形の掘方を有するもので、第70次調査で確認されているものと同方向を向く傾向がある。周辺の調査結果からすると、長岡京期以後、平安時代前期には東に振る傾向があり、平安時代後期には再び正方位に戻ると指摘されている。右京第70次調査検出の建物跡については、13世紀にこの周辺が摂関家の荘園となったことから、荘官クラスの邸宅とも位置づけられている。時期・建物跡を特定することはできなかったが、2基の鍛冶炉、フイゴ羽口の出土など鍛冶生産関連遺構・遺物については、右京第70次調査で竪穴式住居跡から鉄滓が出土していることから古墳時代の可能性もあるが、周辺の遺構・遺物の検出状況からすると、平安時代の邸宅内に付随する鍛冶工房であったとも考えられる。

(増田孝彦)

注1 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第70次(7ANOIR地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第9冊 長岡京市教育委員会)1982

注2 木村泰彦「長岡京跡右京域の調査 第324次(7ANOIR-2地区)調査略報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和63年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1990

注3 續伸一郎「長岡京跡右京の調査 右京第118次(7ANNM地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』昭和57年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1983

- 注4 中島皆夫「長岡京右京第611次(7ANNM-2地区)調査概要—長岡京跡右京七条三坊十町、友岡遺跡」(『長岡京市文化財調査報告書』第42集 長岡京市教育委員会)2001
- 注5 中尾秀正「長岡京跡右京域の調査 右京第423次(7ANNKC-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成4年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1992
- 注6 中島皆夫「長岡京跡右京域の調査 右京第434次(7ANNKC-3地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報』平成5年度 (財)長岡京市埋蔵文化財センター)1993
- 注7 竹井治雄「6. 長岡京跡右京第787次(7ANNM-4地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第111冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2004
- 注8 竹原一彦「4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第115冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2005
- 注9 戸原和人「4. 長岡京跡右京第856次(7ANNM-6地区)・友岡遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2006
- 注10 中川和哉「15.平成19年度京都第二外環状道路関係遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第106号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注11 岩松保・大藪由美子「長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について」(『京都府埋蔵文化財情報』第107号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)2008
- 注12 杉江貴宏・坂内裕志・木村啓章・乾茂年・天池佐栄子・松下道子・阿保悠希・山本弥生・中島恵美子・山川幸乃・荒川仁佳子・福島厚子

# 圖 版



(1) 調査地全景 1～3 トレンチ(上が北)



(2) 調査地全景 1～8 トレンチ(上が北東)





(1) 調査地全景 3・4 トレンチ(上が南東)



(2) 調査地全景 1～3 トレンチ(上が北西)

(1) 1・2 トレンチ調査前全景  
(南西から)



(2) 3・4 トレンチ調査前全景  
(北東から)



(3) 1 トレンチ全景(南から)





(1) 2・3トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ土坑 S K149  
検出状況(北東から)



(3) 2トレンチ土坑 S K149  
遺物出土状況(南東から)



(1) 2 トレンチ S K149 完掘状況  
(北東から)



(2) 2 トレンチ 掘立柱建物跡  
S B40(北から)



(3) 2 トレンチ 掘立柱建物跡  
S B40(西から)



(1) 2 トレンチ溝 S D02・30 全景  
(西から)



(2) 2 トレンチ土坑 S K150  
(北から)



(3) 2 トレンチ掘立柱建物跡  
S B179(北西から)



(1) 2 トレンチ掘立柱建物跡  
S B 180(南西から)



(2) 3 トレンチ掘立柱建物跡  
S B 120・121(南西から)



(3) 3 トレンチ掘立柱建物跡  
S B 120(西から)



(1) 3トレンチ掘立柱建物跡  
S B121(南西から)



(2) 3トレンチ土坑 S K140  
(南から)



(3) 3トレンチ竪穴式住居跡  
S H190遺物出土状況(西から)

(1) 3 トレンチ 竪穴式住居跡  
S H 190 完掘後(南西から)



(2) 4 トレンチ 全景(東から)



(3) 4 トレンチ 掘立柱建物跡  
S B 130(北から)







(1) 4 トレンチ 竪穴式住居跡  
S H175(南東から)



(2) 4 トレンチ 竪穴式住居跡  
S H175(北西から)



(3) 4 トレンチ 竪穴式住居跡  
S H175遺物出土状況(東から)

(1) 5 トレンチ調査前全景  
(南西から)



(2) 5 トレンチ西半分全景  
(東から)



(3) 5 トレンチ東半分全景  
(南西から)





(1) 5 トレンチ掘立柱建物跡  
S B330(北西から)



(2) 5 トレンチ土坑 S K222  
(南から)



(3) 5 トレンチ土坑 S K222  
完掘状況(南から)



(1) 5 トレンチ土坑 S K 298  
(南から)



(2) 6 トレンチ調査前全景  
(南から)



(3) 6 トレンチ全景 (北から)



(1) 6 トレンチ全景 (北西から)



(2) 7 トレンチ調査前全景  
(南から)



(3) 7 トレンチ全景(南から)



(1) 7 トレンチ土器溜まり S K 221・不明遺構 S K 263(北から)



(2) 7 トレンチ不明遺構 S K 263  
(東から)



(3) 7 トレンチ土器溜まり S K 221  
(東から)



(1) 7トレンチ土器溜まり S K 221  
遺物出土状況(北から)



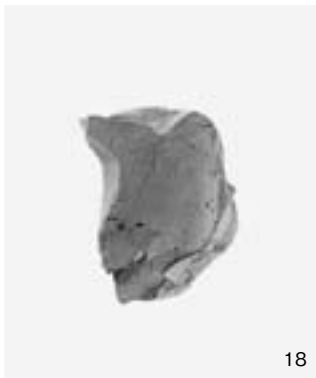
(2) 7トレンチ土器溜まり S K 221  
二耳壺出土状況(西から)



(3) 7トレンチ土器溜まり S K 221  
完掘状況(東から)







## 京都府遺跡調査報告集 第133冊

平成21年 3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189  
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141